

令和 3 年 6 月 20 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02417

研究課題名（和文）鎌倉後期から室町期における歌論・連歌論についての韻学史的研究

研究課題名（英文）A phonological study of waka theory and renga theory in the late Kamakura period to the Muromachi period

研究代表者

岡崎 真紀子 (OKAZAKI, Makiko)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：30515408

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：鎌倉時代後期から室町時代に成立した歌論や連歌論に現れる、日本語の音韻に関する観点からの叙述や、韻学を利用した考え方にもとづく叙述に着目して考察した。その考察を通して、和歌や連歌について論じた言説を、韻学史という観点からとらえ直し、文学と日本語学の方法を架橋する視座から、日本の中世後期の詩歌の深奥にある言語意識と思想の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の中世における歌論・連歌論は、韻学と深い関わりを持っているが、これまでの研究ではそれについて十分検討されていなかった。本研究は、その点を考察することによって、中世の詩歌の深奥にある、言語に対する意識や思想の一端を明らかにした。この研究成果は、日本の言語文化の根源にあるものを考えることにも繋がる意義を有すると思われる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the descriptions of Japanese phonology in the waka theory and renga theory from the late Kamakura period to the Muromachi period. Through this examination, I analyzed the discourse on waka and renga from the perspective of the history of phonology. Using the research methods of literature and Japanese linguistics, this study elucidated some of the characteristics of poetry, language consciousness and thought in medieval Japan.

研究分野：日本文学

キーワード：和歌 連歌 歌論

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は「鎌倉後期から室町期における歌論・連歌論についての韻学史的研究」と題する。ここで掲げた「歌論」「連歌論」とは、歌学書、古注釈、連歌論書その他に見られる、和歌・連歌の言語のありようについて理論的に述べた部分のことを言う。歌論についての研究、連歌論についての研究にはそれぞれ、すぐれた先行研究がある。しかし、未だ開拓されていない領域がある。それが、韻学(とくに悉曇学由来する考え方)との関わりから歌論・連歌論を問うことである。具体的には、次の点に着目して研究を進めるべきであると考えた。すなわち、仏教經典の梵字をめぐる学問である悉曇学・韻学と、悉曇学・韻学に立脚してつくられた日本語の音図、そしてそれにもとづく言語意識が、鎌倉後期から室町期の歌論・連歌論に現れる点である。

研究代表者は、本研究を開始する以前に、和歌及び歌学書・古注釈を研究対象として、仏教經典に関する学問からくる要素を和歌がどのように受容したのかという観点から、研究を進めてきた。その際に主としてとりあげてきたのは、平安後期から鎌倉中期にかけての和歌及び歌学書・古注釈であった。そのような研究の経緯を背景として、本研究では、それまでの研究の方法と着眼点を継承しつつ、対象とする時代とジャンルをひろげ、鎌倉後期から室町期の歌論・連歌論を主にとりあげる研究を着想したのである。

## 2. 研究の目的

日本における言語に対する意識の、最も根底にあるのは、日本語の音韻及び文字を網羅した音図であると思われる。音図は、梵字をめぐる学問である悉曇学を基盤として平安後期に成立したものであり、文学論や思想を生む想像力の源泉にもなった。とりわけ、鎌倉後期から室町期に成立した『竹園抄』、『知連抄』、『さゝめごと』等の歌論・連歌論には、音図にもとづく音韻相通説や連声説といった、韻学的な観点からの記述が特徴的に現れており、注目に値する。それらの記述は、平安後期から鎌倉中期までの歌学書・古注釈の記述とは質的に異なり、近世における契沖や本居宣長の学問に現れる韻学的な観点からの記述とも性格が異なる。

そこで本研究では、鎌倉後期から室町期に成立した歌論・連歌論に着目し、韻学史という従来に無い観点から検討することによって、その特質を明らかにすることを旨とした。そして、文学研究の方法と日本語学の方法を架橋した独自の研究の視座から、日本の中世における詩歌の深奥にある言語意識と思想のあり方を解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 鎌倉後期から室町期における歌論・連歌論について、本文等の資料を収集したうえで、注釈的な検討をおこなう。

(2) 韻書類や悉曇学書等の文献を収集し、日本語の音韻に関して言及した記述に着目し、その記述を抜き出して考察する。

(3) 連歌の賦物における韻学的な発想をもつものに着目し、それに関する資料を収集する。

(4) 上記の(1)で収集した歌論・連歌論の記述と、上記の(2)で収集した韻書類や悉曇学書等の記述を比較検討する。

(5) 上記の(3)で着目した、韻学的な発想をもつ賦物による連歌について、注釈的な読解をおこなう。

(6) 以上の(1)から(5)までの検討をふまえたうえで、平安後期から鎌倉中期にかけての和歌・歌学書及び古注釈との比較をおこなって、鎌倉後期から室町期における歌論・連歌論についての、韻学的な観点からの考察をまとめる。

以上のような研究を、文献資料にもとづく実証的な方法をもとに、個々の資料について丹念に読み込む注釈的方法に立脚して進めた。

## 4. 研究成果

(1) 鎌倉後期の歌論書である『竹園抄』、南北朝期の連歌論書である『知連抄』と『長短抄』、室町期の心敬が著した連歌論書である『さゝめごと』について、注釈的に検討をおこなった。とくに、『竹園抄』における「ひゞきの親句につきて又二種あり。一には五音相通、二には五音連声なり」といった発想や、『知連抄』における「連歌には五韻連声、五韻相通と云事あり」といった記述、『知連抄』や『長短抄』に見られる、日本語の音図を連歌論に掲出する姿勢、そして『さゝめごと』における親句・疎句の連歌論などに着目した。以上のような、音韻相通説、連声説、音図、親句・疎句説について考察し、従来の研究では十分明らかにされていなかった読解を深めることができた。

(2) 馬淵和夫編『影印注解悉曇学書選集』、同『韻鏡校本と唐韻索引』、奥村三雄『聚分韻略の研究』、『古辞書研究資料叢刊』等に収載される悉曇学・韻学関係の文献をとりあげ、馬淵和夫『日本韻学史の研究』、住吉朋彦『中世日本漢学の基礎研究』、小川剛生『中世の書物と学問』などの先行研究を参照しながら考察した。とくに了尊『悉曇輪略図抄』、『韻鏡』、『聚文韻略』等に着目し、日本語の音韻に関して言及する部分について、和歌・連歌及び歌論・連歌論との関わりを視野に入れた観点から検討し、読解を深めることができた。

(3) 百韻連歌のなかには、たとえば「二字反音」「三字中略」等といった連歌に特徴的な賦物をもっているものがある。こうした賦物はいずれも、韻学的な発想に由来するものである。それらについて、まず用例を収集したうえで、韻学に関する文献に現れる「反音」という用語も参照しながら検討し、連歌において上記のような賦物がもつけられた意義と背景の一端を明らかにした。

(4) 『竹園抄』、『知連抄』、『長短抄』、『さゝめごと』における、音韻相通説・連声説が叙述された部分、音図を掲げる部分、親句・疎句論を述べた部分について、上記の(2)で読解した韻書類や悉曇学書等の記述と比較検討した。それによって、歌論・連歌論において、悉曇学・韻学からくる言語意識がどのように受容されているかを具体的に明らかにした。

(5) 「二字反音」「三字中略」等といった連歌に特徴的な賦物をもっている百韻連歌について、注釈的な検討をおこない、句の読解において成果をあげた。

(6) 上記の(1)から(5)までの検討をおこなったうえで、藤原教長『古今集註』、顕昭『袖中抄』そして仙覚『万葉集注釈』などといった、平安後期から鎌倉中期までに成立した歌学書・古注釈に現れる、悉曇学・韻学に由来する発想にもとづく叙述を参照した。そして、それらの叙述と『竹園抄』、『知連抄』、『長短抄』、『さゝめごと』の叙述を比較することによって、鎌倉後期から室町期における歌論・連歌論に現れる韻学的な発想の特色を明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岡崎真紀子	4. 巻 47
2. 論文標題 『続古今和歌集』神祇歌と高野	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 叙説	6. 最初と最後の頁 64-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡崎真紀子	4. 巻 8
2. 論文標題 学会時評 中世	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アナホリッシュ国文学	6. 最初と最後の頁 200-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡崎真紀子	4. 巻 101
2. 論文標題 藤原俊成における声なるものの諸相	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中古文学	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡崎真紀子	4. 巻 -
2. 論文標題 「五音連声」の歌学史	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『画期としての室町』（勉誠出版）	6. 最初と最後の頁 335-359
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡崎真紀子	4. 巻 -
2. 論文標題 『毘沙門堂古今集注』における韻学的なもの	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『中世古今和歌集注釈の世界 毘沙門堂本古今集注をひもとく』	6. 最初と最後の頁 105-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 岡崎真紀子
2. 発表標題 藤原俊成における声なるものの諸相
3. 学会等名 中古文学会秋季大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 国文学研究資料館編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 695
3. 書名 『中世古今和歌集注釈の世界 毘沙門堂本古今集注をひもとく』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------